講　　評

評価委員　重　田　定　正
下　田　　巧
森　山　　豊

「厚生省心身障害研究」においては，かなり多額の研究費をもって，障害の発生原因，防止並びに生後の療育，福祉対策などにわたる非常に広範な研究が行われ，著しい成果をあげつつあることは，まことに慶賀にたえない。同じ国費による研究でも，文部省関係の研究は，基礎的，長期的研究であるのに対し，厚生省関係のものは，臨床的で，なるべく早く行政，福祉対策に応用し得るものとなっている。

この厚生省心身障害研究のうち有馬班は「長期疾患療育児の養護・訓練・福祉に関する総合的研究」を分担している。その総括は班長の報告の通りで，困難ではあるが，重要な問題について，この報告書にみられるように，昭和57年度においても，見るべき成果を得ていることに敬意を表したい。

1.　発達遅滞乳幼児の療育目標の効果の評価に関する研究（下田　巧）

本研究は発達遅滞乳幼児に対し，適切な療育対応のため，個々の発達遅滞の実態を正確かつ詳細に把握する目的をもって「ポテージ早期教育ガイド」を参考として，日本の現状に合致した発達評定尺度プログラムの開発を目的としたもので，その間にあって，評価・療育目標・効果の評価の方法等について研究した。

研究の課題は，第１年度において発達評定尺度表を作成し，発達遅滞乳幼児に適用し改訂を加え第２次案を作成し，さらに全国各地の発達遅滞乳幼児に適用し改訂を重ねて，第３次案を作成し一応の研究を完結したもので，信頼の高いものとして評価できる。

発達遅滞乳幼児に対し，具体的な療育目標，指導内容を定め療育に当たる上で，本研究成果を活用することにより，一層療育効果を高められることが期待される。

2.　発達遅滞児の早期療育訓練の方法に関する研究（森山　豊）

発達障害の最初のサインとして，(1)運動発達のおくれ，(2)そのひずみ，(3)コミュニケーションのおくれ，(4)そのひずみの４つをあげている。これらについて発達評価表を再検討して，その改良と標準化を試みている。これらの評価表が改善されて，なるべく早期に，広範囲に，あるいは全国的スクーリングに適用されることを切望する。

3. 乳幼児の発達におよぼす家庭環境要因に関する研究（森山　豊）

正常児と対比しつつ検討し，超早期療育の基礎となる障害児の早期診断法として足圧測定や，がらがらによる聴覚的定位の応用，さらにダウン症児の超早期療育の訓練プログラムについても検討している。その結果，これらの方法が価値あること，ダウン症児においては，療育開始の年齢が早いほど効果が大きいことを証明している。

なお障害児の療育には，親とくに母親の療育態度が関係することを明らかにしている。このことは，障害児のみならず，親の教育も重要なことを示している。

4. 長期在宅障害児の家庭療育に関する研究（重田定正）

本研究は主として脳性麻痺児と重症心身障害児を対象としたもので，運動機能に問題のある長期在宅障害児の家庭療育のあり方を各都道府県に必置されている肢体不自由児通園施設について調査した結果，障害児の家庭療育の中での母親の態度が障害児の身体機能の発達に影響を及ぼすことを母子入園経験の有無によって実証したので，今後は肢体不自由児施設をセンター的存在として活用することを提唱している。また，母親の心理的負担の軽減にも母子入園の意義が認められた。

さらに，通園施設において重症心身障害児のほかに重度精神発達遅滞のために運動機能に問題がある児童の存在を指摘し，超早期発見と超早期療育の効果を強調し，いわゆる乳児通園の実施を要望している。

全体を通じて，厚生行政施策に学術的根拠を与える点が評価される。

5. 基礎疾患合併症の内容別にみた医療と療育の協力体制の研究（重田定正）

長期療育を必要とする心身障害児に対して医療機関から関連機関に要望されることは，日常生活における保健，医療，発作，行動異常に対する投薬の有効性の判定に関する情報の提供などである。医療機関で，医師，心理指導員などが行なった発達段階の分析評価を基礎とした療育訓練プログラムをつくることが望ましくても，すべての日常訓練を医療機関内で実施することは現状では不可能である。通園施設などと医療機関との間に対象児童の健康に関する情報の交換を定着する必要がある。父兄を介して行なわれる現在の慣行は改められなくてはならない。

本研究を進めるに伴い，守秘義務や情報のコード化の問題を検討することが企画されているが，今後協力体制の完璧を期するためには，基礎疾患が多様で合併症の予測困難な精神薄弱グループの存在を考慮すべきである。

6. 聴覚障害を有する重複障害児並びに重度脳障害児の聴力障害の診断と訓練に関する研究

（重田定正）

重度障害児における聴覚障害の実態を知り，診断上の問題点とその対策，補聴器の装用法とその効果に焦点を当ててこの研究が進められた。ある肢体不自由児施設の検診では，肢体不自由に注意が集中されているため滲出性中耳炎などが看過されていた。ダウン症児の集団においても聴力損失のある者多数を発見した。重複障害者に対しては脳幹反応聴力検査が試用され，その信頼性について報告されている。また，重度障害においても後天的難聴が発生することが明らかにされた。

重度脳障害児でも残存聴力があれば補聴器の装用効果は認められるが，聴力障害の程度の確認と忍耐強い装用指導が不可欠であることを強調している。補聴器の活用は，前言語的コミュニケーションによって，親と子の間に情緒的安定が得られることでも意義がある。

7. 地域における発達障害児の総合的ケアに関する研究（重田定正）

心身障害児のニーズが多様化しつつあるので，通園施設はいかに対応すべきか，また精神薄弱児通園施設の機能をいかに拡大すべきかは，障害児療育の当面する問題である。本研究はこれらの点を考慮して，施設のオープン化活動，ボランティアとの連携，総合通園センターのあり方の3局面から検討されている。また，1歳6か月健康診査で発見された発達障害児の継続ケアのあり方，ハイリスクの追跡などについて研究された。

また，1歳6か月検診において予測性の高い精神発達測定法について考究し，さらに精神発達遅滞幼児を対象とした療育施設等においてこの方法によって心身障害児の発達，療育効果を吟味しようと企画されている。これら研究調査は，熟練した協力者によって行われているので，他の療育従事者が試行錯誤を繰り返さないですむ点からも評価できる。

8. 慢性疾患乳幼児の健康管理指針の作製に関する研究（森山　豊）

健康管理手帳の作製班においては，手帳のサイズ，内容などについて検討している。その試作したものについて，各方面の幅広い意見を徴しているが，医師側，保護者側それぞれ異なった意見があり，未だ成案は得ていないようである。しかし，このような手帳は，価値があるので，なるべく広く応用できるような手帳を試作していただきたい。